

# 創新郷土芸術賞に輝く

本格的に能を学ぶようになったのは、戦後の二十一年に、亡父、宇一さんの手ほどきを受けてか

## 受賞者の横顔

高橋三郎さん  
(能)



能は余分の動きを一切排除する幽玄の芸と高橋さん

# 自戒怠らぬリーダー

ら。宇一さんは会津の城下町近郊の農村の出で、いわゆる「会津宝生」を築き上げた。能は演ずる役の思いを、内に、内にと取り込み、身振り、手振りを極力少なくして、余分の動きを削り、わずかに足の運びに表情を出す幽玄の芸。それだけに楽しみも深いがなじむまでが大変といわれ

る。しかし、父の影響もあって、い古用としては非の打ちどころな歩数の微妙な感覚が的確につかまぬか、当時二十三歳であったが抵抗い立派な能舞台をつくれた。この舞台が出来てからは「視界の狭い迷わぬようになった」という。能の演目は遠い曲、近い曲(ホ)がら、金道四人の同流能楽士の

< 3 >

## 無限の追究、三流派集う会実現に意欲

ビュラーな曲)合わせて百八十番あるが、いずれも幽玄の底には人間の「生真さ」を蔵して現代感情

人、鉏路の同好五十人のリーダーとして厳しい古い打ち込んでいる。舞台にはまた、テレビカメラとVTRを備え、いま演じたものを直ちに再現して反省し合う合理的けい古法を採用しているが、余りに便利に過ぎると、芸道精進のさまたげにもなる...と自戒を怠らない。

鉏路の宝生会の歴史は古く、大正十二年創設以来五十三年、四十九年には市の文化奨励賞を受けている。鉏路はまた札幌に次いで能人口の多いところ、五流派のうち宝生、観世、喜多の三流がある。来年にはこの三流が相集う会を持ちたいものと、いま話し合いを進めている。

「どんなしろつとでも、その謡や舞いのどこかには、必ず良さと、素晴らしい点があるもの。だから人との触れ合いで啓発されるところが多い」と能の功績を強調しているが、すま子夫人、長男、秀一さん(今春東京で就職)長女、秀子さん(大学二年)のほか、兄の子供さんもまた京都で能を勉強中という「能一族」の長でもある。五十三歳。